

和 崎 春 日*

Haruka WAZAKI *



民族交流都市・大須の自他融合

～滞日アフリカ人から若者・芸能者まで

Fusion of the Self and others in Ohsu, City of Multi -ethnic Symbiosis-
from Africans Living in Japan to Young Guys and Performers.

1 来訪者を惹きつける街・大須

大須に来て散策すると、いつも「なんかヘンだな」「なんか奇妙だな」「なんかオモシロイ」「わらっちゃうな」ひいては「楽しいな」といった感覚を抱いてしまうことが多い。平成19年(2007)に名古屋大学で国際シンポジウムを開催したとき、ベルギー人、カメルーン人、フランスの研究機関で働くアメリカ人の三人の教授を招待した。かれらと一緒に名古屋界隈に飛び出した。栄に行き、白川公園に行き、徳川博物館に行き、大須に行った。みんなそれぞれ名古屋の代名詞である。大須観音さんにお参りして、大須の街を歩いた。若宮八幡さんに渡って栄を歩いた。あとは、名古屋城や錦や名古屋港や金山の中央市場などの案内の冊子を手渡して、かれらの自由行動にまかせた。あくる日聞くと、大須にもう一度戻ったというのである。大須の喫茶店に長時間座ってアーケードの道行く人たを眺めていた。「飽きない」「オモシロイ」という。私も、そのように日がな、大須観音通のガラス張りの喫茶店で、女性たちに評判だという「ケーキと紅茶」を楽しみながら、長時間、路行く人を眺めてしまったことがある。確かに、「オッ」と思うこと、「ニヤッ」とすることが多い。おじさんが極彩色の服を着て自転車に乗っている。ちょっと年頃がズレてるように思う。でも「イケてる」。

また違うおじいちゃんは、自転車の前の荷物かけと後部座敷に若々しい現代ファッションの布を数枚ずつ、自分流儀にからめて「車」のお洒落をしていた。「やってくれるねえ」。人の表現に何の規制もない。年齢など関係ない。肩を並べて談笑しながら歩いていくおばあちゃんの顔に、生気が満ちている。ショールが粹だ。大須の路行く人の服装・行動・道具立てに、「ちょっとした工夫」や「奇抜なアイデア」や自己表現がある。

フランスの研究者ハウスマン博士は、いま喫茶店の中から見ているかのように、フランス語で、「カッポレのような底が厚い靴を履いたローティーンのひらひらメイド風お姫様」が何人も何度も歩いてきた様子を興奮気味に語り、「おー、ロリ・ゴチ!」といて驚嘆と喜悦の表情を見せた。そして三人で、「オウス、ロリ・ゴチ!」と声を合わせた。「ロリータ・ゴチック」という名称のこの若者ファッションは、東京の渋谷や原宿にも見られるが、むしろその起源性と発展が、名古屋を中心にみられ、さらに大須こそ「ロリ・ゴチ」ファッションのメッカとして知られていることを、三人の文化人類学者は知った。ベルギーのプティ博士は、「大須ロリ・ゴチ」から発して、この種のファッション雑誌を探して日本のお土産として買って帰った。文

*中部大学国際関係学部国際文化学科

化研究の専門家である文化人類学者の三人は、単に奇抜な都市流行などではなく、もっと地道な文化の生活性、成熟性、発信性、創造性と想像性といった諸側面から、歴史と新規が照らしかう、栄でもどこでもない、大須の文化を見抜いて評価したのである。

喫茶店のウィンドウから覗いていても、ブラジル・ペルー系らしい人たち、アフリカ人かアフリカン・アメリカン、中国からのツアー観光レッテルを胸に貼った中国人旅行者たち、こうして多民族が大須に集まっていることがわかる。その線上に、私たちもこうしてベルギー、フランス、カメルーン、日本から大須にきている。確かに、大須は、多民族交流都市である。だが、それだけではない。老若男女や多様な職業、多様な階層がここで交わる。この大須がもつ多元的な交流・共生のあり方を、本稿で論じていこう。

名古屋の町案内のテレビ番組を作りに来る東京・関西のメディアは、ベトナムというと必ずといっていいほど怒涛のように押し寄せるオートバイの波を映すように、一つ選ぶとすればまず大須で番組をつくる。大須は、名古屋の顔なのである。ソトから見た観光や買い物の地・大須である。大須には、老若男女やいろんな人がこぞって集まってくる。確かに、大須には人びとを惹きつける歴史資源が豊富である。

二 歴史の街・大須

まず、大須は歴史の街である。神社仏閣が多い。徳川家康は、築城とならんで城下町の建設をおこない、防衛上の観点から、街道筋との交点にあたる名古屋城の東と南に寺院を集中させた。その多くが、清洲からの「引越し」寺院で、東部では尾張徳川家の菩提寺である建中寺（現

在の東区筒一丁目）を中心に、臨済宗、日蓮宗の寺院を約40集中させた。南部では、大須の真福寺、七寺などを代表として、曹洞宗、浄土真宗などの寺院もふくめて、約50カ寺をここに集め、熱田街道からの進攻に備えた。現在の大須の始まりは、慶長17年(1612)に、徳川家康の命により、尾張国中島郡長岡庄の大須郷（現在の岐阜県羽島市桑原町大須）から、宝生院真福寺をここに移転させ、その地の名前をとって大須と呼んだことに由来する(写真1)。

したがって、今日でも、大須には、真福寺(大須観音)、浅間神社、三輪神社、万松寺、大光院(明王殿)、北野神社、七寺、日出神社、春日神社など、神社・仏閣が多い。信長公を供養する総見寺、さらには光勝院、陽秀院などもある。ちょっと足を伸ばせば、北には若宮八幡社、南には西別院、さらには東別院もある。大須は、寺社町であることから、和菓子技術や花、神棚、仏具、呉服、和装身具、和食などに関わる「巧み」と「商い」がこの町に発達した。寺社の縁日も多い。おじいちゃん・おばあちゃんたちや家族連れがお参りかたがた必然的に寄ってくる。お参りでイニシヤチブをとるのは、宗教・習慣の知識人、おじいちゃん・おばあちゃんである。元気がいい。子どもたちを唱導する大きな声がよく聞こえる。

遠くからのお参り客もいる。同時に、近在や地元の大須住民の子ども連れもいる。観光だけではなく、この街の確かな姿も大事だ。地元民たちの日々の行動である。東仁王門通にある大須コミュニティセンター(通称「コミセン」のビル四階)では、地元口調のおばあちゃん二人が、ここで習い事を済ませた。三階の大須商店街連盟に詰めている役員たちと大須の地域メンバー同士らしい冗談を交えた挨拶と情報交換をした



写真1 大須観音・真福寺と仁王門通りを案内するビル。新旧が交錯する。

あと、脇をとった小中学生たちに、「ちゃんと練習してる?」「えらいわネエ」と声をかけた。ちょうど大須太鼓の練習が終わったところだ。大須の商店街は、地元の老若男女も交わる街なのである。

三 異世代交流の街・大須

大須太鼓の若者世代と「にこにこクラブ」の老世代

大須太鼓は、平成4年(1992)に創始され、翌平成5年、国が伝統郷土芸能の復興・発展のために設けた「にぎわい創生事業」に大須が立候補する形で、補助金をえて本格的にスタートした。大須には、大須一伏見間で囃子をかなでて練り歩いた祭りがあったという伝承があり、その囃子の復活・保存をめざし、大須太鼓保存会が結成された。組織としては、大須商店街連盟のもとに大須太鼓保存会を置くようにしている。したがって、平成22年(2010)の春祭りでも、大須のコミュニティセンターがある建物の三階に大須商店街連盟の事務所があるのだが、この事務

所の奥で法被を着替えたり準備したりし、ここから太鼓の演奏へと出かけていく。大須太鼓の子どもたちは、役員の大人たちや習い事の老世代にここで出会い、声をかけられ、時に注意を受け、励まされもする。

当初は、地域の女性が主に叩いていたものが、子どもが積極的に参入してくる。それは、平成5年(1993)に、大須小学校で特別活動として、和太鼓がとりいれられたことによる。大須小学校での活動が、大須地域の活動と、平成9年(1997)に結びつくことになり、大須太鼓にこのとき「こどもの部」が創設された。「大人の部」は、女性や中学生、高校生で、常時15～16人がメンバーとして活躍している。「こどもの部」は、大須小学校の四～六年生の男女生徒30人で、女の子のほうが多い。「こどもの部」には、中高生や大人の部の一部の人たちが、笛や下拍子の奏者として参加している。太鼓の技術指導は、新瑞橋にある東海太鼓センターから受けている。このソトからのエネルギーを吸収していること

も大事である。

大須太鼓の練習は、大須地域社会の大須小学校との連携が強くはかられる。大人の部の練習は、毎週月曜日の6時半～8時半に大須小学校の会議室でおこなわれる。この会議室は、小学校内にありながら、まるで地域のなかにあるように「大須どんどん広場」と呼ばれる。こどもの部の練習は、毎週金曜日である。こうして、地域社会と小学校とが相互に入りあっている。大須和太鼓は、万松寺商店街の「氷の彫刻コンクール」のお祭りにも出かけていって演奏する。

大須地域社会と大須小学校との交流は、節分会のときにもある。大須観音では、大須の大人たちが赤鬼・青鬼と福の神に扮して豆まきをおこなうが、このときに大須観音の行事に小学生が一緒に加わる。大須小学校では、学校や子どもたちが「地域に根ざし、地域に支えられ、地域に育てられてきた」という標語・理念のもと、「生活科」の一環として「まちかど学習」(平成11年〈1999〉)を実施している。二年生は大須のまつりを調べ、三年生は大須学区つまり小学校のある大須一丁目から大須観音のある二丁目そして大須郵便局のある三丁目までを調べて、大須の商店街に分け入る。春・夏・秋・冬の年4回、街に繰り出し、授業参観の日にその成果を発表して、大須の中核世代・壮老世代に働き返していく。

老壮世代の大須～おじいちゃん・おばあちゃんの「街喜び」

大須の若者には、自主性が見られる。小学生が大須商店街で「トイレ貸してください」と言っているのを目にする。大須には、名古屋スポーツセンターのスケートリンクがあることから、上前津や大須のこの地域から世界のトップレベ

ルを誇る名古屋の女性アイススケート選手が巣立っていった。浅田真央がそうである。村上佳菜子も恩田美栄もそうである。大須は、誇れる街なのである。若者が元気だ。おばあちゃん、おじいちゃんたちも威勢よく「伊藤みどりも大須の中学よ(前津中学)」とよく口にする。若者の力を借りて老壮が、老壮の知恵を借りて青年層男女や幼少が、育て合い支え合う、という有機性が大須にはある。

まず、店主の元気がいい。呉服の話など、老齢、年配であってもよく喋る。大須コミュニティセンターで開かれている「にこにこクラブ」におじいちゃん・おばあちゃんが集ってくる。中区のなかでも、大須学区には「下町」としての誇りがある。同じ中区でもお城の近くで丸の内の「高級性」については「名城学区は私たちと格が違う」といって尊敬の念をあらわすが、越境などして「ずるい」といった非難の念も込める。同時に「庶民の町」大須への自負がにじみでる。大須は、中区の中でもっとも高齢化率の高い街のひとつである。毎週月曜日、「にこにこクラブ」が開かれて、音楽やフラワーデザインなどさまざまな趣味を深める。「にこにこクラブ」は、行政から見ると、社会福祉法人・名古屋市中区社会福祉協議会がおこなう自立支援事業だが、「支援」を超えて、大須の老人たちが積極的に集まる社交クラブのようにさえなっている。定員は20名だが、各人が持つ「おばあちゃんネットワーク」により、大須在住老人の約25%がここに関わってコミセンや街に集ってくる(大須地域・福祉推進指導員主事・染野徳一氏談:長坂康代調べ)。ここでのイベントでの広がり大きく、敬老の日には、祝賀のつどいに70歳以上のおじいちゃん・おばあちゃんに約1100通案内を出す。これに約750人も参加してくる(大須学区区政協

力委員長・後藤喜八郎氏談：長坂康代調べ)。長らく大須演芸場がこのイベント会場だった。名古屋寄席の復興を願って昭和40年(1965)に20年ぶりに再興された場所だ。愛されている。参加人数の関係で平成16年(2004)から大須のローズホテルへと会場が変わっている。

ヘルパー2級以上の資格がいる「生きがい活動支援員」の鎌田直子さんは「大須地域は元気でおしゃべりな人が多いから、半日おしゃべりで終わることも多い」という。折り紙講師は「大須では教室プログラムを詰めてこなくても、みんな自主的にどんどん(ときに勝手に)動くからラクだ」という。したがって、クラブの運営には、会の規定を設けるほど各自が活発だ。柄物教材などくじ引き、公平を保つこと、お茶出し、弁当配布、出欠確認、弁当代集金、座席ローテーションなど、細かいことまで決めている。主張が多いのである。クラブの帰りに寄る大須商店街の喫茶店での雑談、噂、「恋」の話、情報の交換が、これまた活発でかまびすしい。ここでの

おばあちゃんたちのイニシャチブには元気どころか「迫力」がある。

大須学区には民生委員が13人いるが、75歳までである。独居の老人を支える。老が横に共に支えあうようになっている。元民生委員で80歳のおばあちゃんが元気に喋る。気概がある。児童委員でもあったこのおばあちゃんは、「生徒とPTAと先生と児童委員がもっと交流しよう」と大須小学校に提案した。街でのお互いの声かけや挨拶を奨励する講演を全校生徒の前で喋ったという。つまりは、幼少世代、中核世代、老壮世代、全世代が結びつこうという提案を老からしたということが、すごい。「される身」ではない主体性がある。

老世代がソトに出ている街、老壮が生き活きしている街が、生活者として一番幸せな都市である。日本全国の都市にとっての課題・高齢者の「街喜び」の相貌を、大須はすでにかかなりの程度で示しているのである(写真2)。



写真2 大須の新しいシンボル「招き猫」横で談笑する老人たち。

四 商店街が縦横に交叉する「面」の街・大須 いくつもの商店街～競争と共栄

大須には、現在（平成22年〈2010〉4月）九つの商店街が集中して連盟をつくる。昭和30年（1955）2月に設立された大須商店街連盟である。競い合い、活かし合うように軒を並べている。万松寺通商店街振興組合（119名）、大須新天地通商店街振興組合（55名）、名古屋大須東仁王門通商店街振興組合（55名）、大須仁王門通商店街振興組合（35名）、大須観音通商店街振興組合（30名）、大須門前町通商店街振興組合（28名）、大須本通商店街振興組合（25名）、赤門明王商店街振興組合（20名）、そして平成20年になって加わった大須赤門通商店街振興組合（80名）、の九つである。447名の商店主が加わり、ここにある総店舗数は、いつも微妙に動いているが、約1100店舗を数える。一本の通りではない、大きな広域型の面の商店街である。

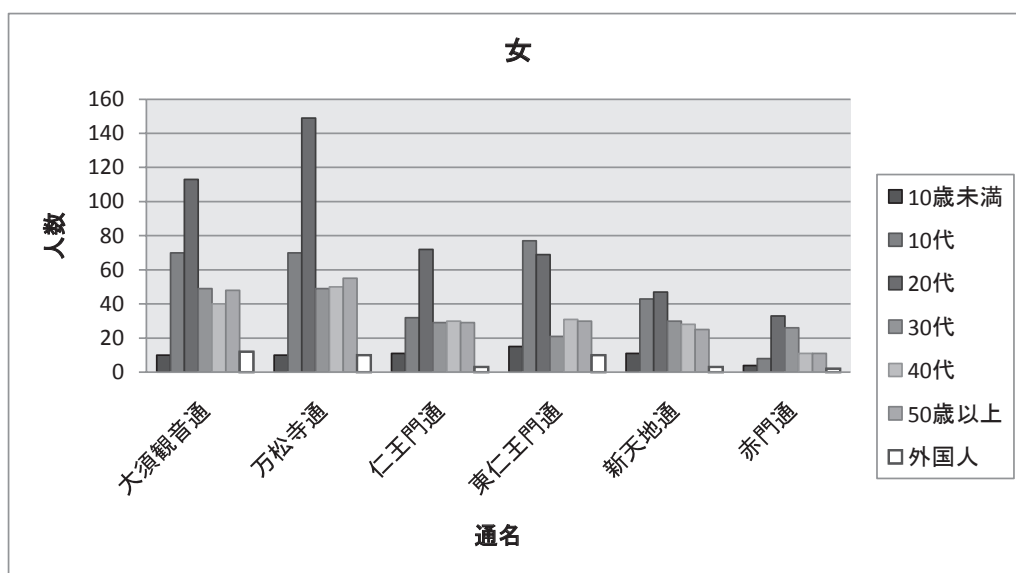
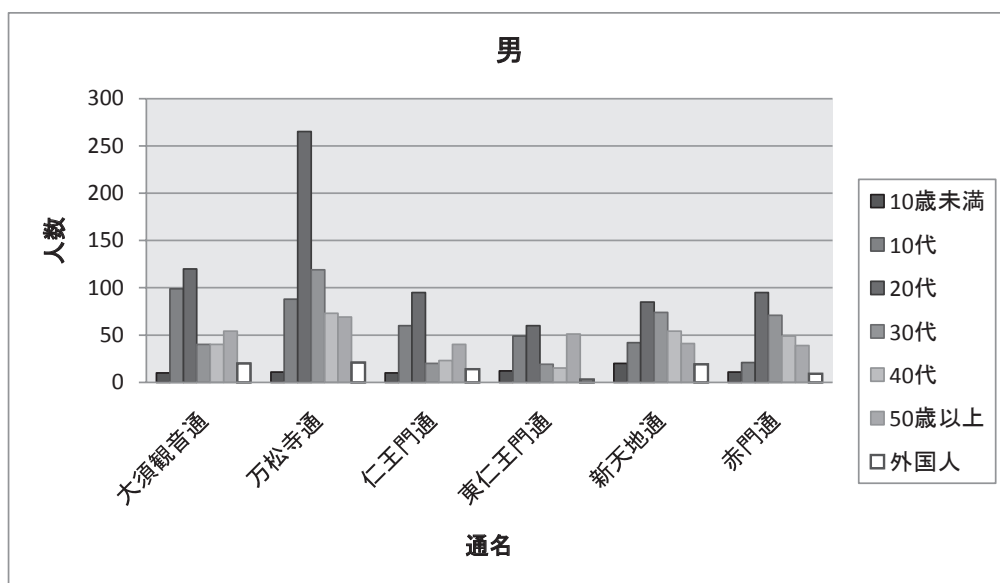
大須全体をみると、最近になって、コメ兵（こめひょう）ビル、大須301ビル（三階に中華街）、万松寺ビルなど大型商業施設が次々にできた。これに昔ながらの小さな商店や、由緒を謳う呉服店・うなぎ店などが交わって、大型店と小売商店がクロスし混在し共存している。新旧や「伝統と現代」が交錯している。例をとってこれを少し詳しく見てみよう。

これらの商店街のうち、東西に走っている四つの商店街に注目してみよう。北の東西を走る、大須観音通商店街、万松寺通商店街、それに並行して南の東西を走る、仁王門通商店街、東仁王門通商店街、である。この四つの商店街は、東西に走っている遊歩道である、という共通の特色がある。全体として、一つの「大須」を形づくっているわけだが、やはり一つ一つ通りに特色がある。

その大須の通行量を名古屋大学の大須調査で調べた（資料1参照：松久実代子調べ）。日曜日の大須は人手が多い（2004年6月13日（日）午後2時～3時の1時間調査）。新天地通と赤門通の二つもあわせて調査している。ここで、万松寺通に二十代の客が多いという特色がわかる。これは、以下に述べる、通りの店の構成によるものである。ここで、全体の通りでいえることでは、二十代が飛びぬけているものの、各年代が老若男女、多数この街に繰り出していることも、街の活性ある実態として特記できる。さらに、全体として共通するのは、たった一時間の間であるのに、どの通りにも外国人の往来が認められることである。やはり大須は日本と外国が強く交わる街なのである。そこで次に、各通りの特色を見てみよう。

まず、大須観音通は、飲食店が非常に多い。36店舗中18店舗（平成16年〈2004〉）となんと半分が飲食店である。これは、大須観音さんに一番近いことによる。「食べ歩き」できるものを売っている店が8軒もある。昭和13年（1938）当時、大須観音通に店舗が26軒あった。このときすでに、アイスクリーム屋2軒、氷菓店2軒と、ぶらり「食べ歩き」の店が数軒も存在していた。この「ぶらり感」も昔からかわらぬ大須の魅力だ。大須全体に、衣料品店が多いという印象をもつが、昭和13年でも、ここでは26店中4店と多くない。ここに、コメ兵という大型店が3店、出店してきた。コメ兵は、大須の代名詞の一つともなった店だ。コメ兵のテレビ広告は、中部圏ではよく知られている。大須のおばあちゃんたちは、先代が「段ボール一つ」から商売を始めた、という。昭和22年（1947）、赤門通の五坪の古着屋からはじめ、大型質店として発展し宝石・高級品にも展開した。東京・銀座にも進出してい

資料1 「大須通行人調査」(松代実代子、平成16年(2004)調べ)



る。大須の店舗は大型できらびやかだが、「なんでも安い」が売り物である。この「安価性」も大須のイメージを店々が共鳴して形づくっている。

万松寺通商店街は、規模が大きい。121店舗をかぞえる。衣料品店が55店舗と、約半数を占める(平成16年)。大正から昭和にかけて、今の新天地通で映画館や劇場といった産業が発展し、これを見た客の「俳優や役者と同じ服を着たい」あるいは店からは「俳優や役者と同じ服を売ろう」という心理が、この衣料関係の出店に拍車をかけた。昭和13年でも、当時の148店舗のうち53軒がやはり衣料店であった。男性洋品が多かった。名古屋で通っている「大須といえば(紳士)服」という観念は、歴史的に、この万松寺通の多くの紳士服店の存在によっている。

仁王門通商店街は、大須のなかで最も古い商店街である。食品販売店の割合が他と比べて圧倒的に多い。真福寺・大須観音さんのすぐそばだから、ういろう、漬物、煎餅など、土産物的な物産を売っている店が目立つ。これは、明治31年(1898)まで、仁王門通商店街の大部分が、大須観音さんの境内の中にあったからだと考えられる。参拝客を目当てにした土産物販売である。現在でも、仁王門通は大須門前にあるため、門前すぐの土産物の諸店は、「大須ういろう」「青柳ういろう」など明治、大正、戦前からと、長い歴史をほこる老舗が多い。さらに、祖父母と孫・孫娘、親子連れの参拝客が数多く訪れるため、おもちゃ店が4店もある。

東仁王門通商店街は、雑貨屋の割合が高い。とくに若者向けの雑貨が目立つ。これは、一旦、自宅経営の古い店が閉店したりテナントに貸し出したりして、若者が気軽に新店し、若者向けのおしゃれな雑貨屋が増えたためである。30年

ほど前から世代交代が進んで空き店舗が増えはじめ、平成4年(1992)に半数の店が空くという危機を迎えた。これを安いテナント料と間口の狭い小さな店構えを「積極的な売り」の特徴として広報し、若者経営者が大挙して入った。テナントに女性人気メーカーの古着を扱う店や、1960～1970年代の古着を販売する店が入って、衣料品店の割合がきわめて高い。洒落た漫画喫茶「モンキーズカフェ」やテレビスタジオ「はっぱ屋」(平成16年)、チャイナドレス専門店「こんにちは」(平成16年)など個性的な店が多く出店していた。今でも、滞日ガーナ人の経営するヒップホップ系の服装店もある。だから、この近辺にはとにかくアフリカ人の仲間や客が集まっている。他にも、メキシコ料理タコスの店、ロリータ系・ゴシック系のリサイクル・ショップ、台湾名物屋台など、個性的な店が多いのが、この通りの特徴といえる。

南北の通りにも、特色がある。裏門前通には、家具、神具、たんす店が多い。裏門前通をまっすぐ南に、大須通を越えて渡れば、大須の仏壇街である。寺町にふさわしい商店構成なのである。仏壇製造職人と小売業者でつくる名古屋仏壇商工協同組合には、264の事業者(平成4年〈2001〉)が加盟しており、その70%が、大須やここに隣接する橘町、上前津の門前町に集中している。大須では、水害から仏壇本体を守るために、「みつまくり」と称して高くなった下壇の「名古屋仏壇」を中心に作っている。大須の仏壇作りは、NHKでも名古屋生まれの俳優・竹下景子が出演して番組化され紹介されている。例年、3月27日に、仏壇屋や仏壇職人が中心になって、大須観音・真福寺で古い仏壇の供養祭をおこなっている。仏壇関係の祭りも、やはり大須が中心になるのである。ふれあい広場から北へ、

新天地通やそれと交差する赤門通には、パソコン・ショップ、携帯、電気製品、パーツ店、電気修繕店などが、集中している。

このように、各商店街に多様な店があるものの、異なる特色をアクセントとしてもった各商店街が、交流・共鳴して、全体としての大須を形作っているのである。大須には、何から何までである。大須が「ごった煮の街」とときに形容される所以である。何でもあるから、人が寄ってくる。その客誘引の努力をみてみよう。

五 「確かな大須」がたくらむ「夢ある大須」 コミュニティ維持、防犯上の工夫・努力

前述した地元の老若男女の交流は、大須の地域社会の地道な行いである。地道な大須、確かな大須がある。いわばケ・日常状態にある大須である。大須は他者が沢山はいりこむ街だから、防犯や防災には多くの注意が払われている。

たとえば、大須消防団は、つぎのようなことをおこなう。大須消防団には25名の団員が所属している(平成16年)。毎月19日、午後8時から9時半頃にかけて、定期的な夜警をして回る。大須を二つにわけ、大須一～二丁目、大須三～四丁目をブロックとし、二班に分かれて夜警をおこなう。春・秋の火災予防週間には、3月と11月に行動する。年末には、12月25～30日の六日間、特別警戒をおこなう。火事的主要原因は、一般にタバコ・てんぷら・放火だが、放火が45%ほどを占める。大須でも平成15年(2003)の火事では4件中半分の2件が放火だった。家具屋の前に段ボールを放置していたら放火された。放火されやすいものとして、オートバイ、段ボール、ゴミがある。したがって、店のゴミ出しルールを外国人店主にも理解をえて徹底した。ゴミ出しの日は、夜8～9時までにゴミを

出し、それ以降は出さない。放火時間の平均は、深夜3～4時だから、9時までに収集してしまう。店が連続する商店街なので、類焼を防ぐため、商店街の10%おきにアーケード開閉装置が設置してある。

平成10年(1998)頃は、恐喝やたかりなどが多かったが、警察と協力して土日曜には2～3時間おきに巡回するようにした。その結果、恐喝事件は聞かなくなったという。他にも、常夜灯や防犯カメラの設置にも乗り出した。万松寺通などは、防犯手段を強化して、24台も防犯カメラを設置している(平成15年)。

こうした地道なコミュニティ維持の装置を作り出して街を平常に維持している人たちが、今度は、人が寄ってきてくれるように、夢のようなハレ空間を創りだす努力をする。

誘致・客引きの努力・工夫

人びとを惹きつけるための建築・ハード面の努力を怠らない。アーケードの改装を、商店街が次々に行っている。もとより、万松寺のアーケードが、名古屋初のアーケードである。平成4年(1992)の万松寺通のアーケード改修にはじまり、東仁王門通(平成5、7、9、16年)、新天地通(平成8、9年)、大須本通(平成10年)、観音通(平成13年)、万松寺通(平成14年)、といつも刷新に意を注いでいる。とくに、地下鉄・名城線の上前津駅から降りてすぐ地上にあがったところが、大須のランドマーク「大須まねき猫」の「ふれあい広場」だから、上前津駅8番出口から傘なしで「大須まねき猫」までこられるようアーケードを整備した。

さまざまな工夫も導入している。お客や観光客を導く案内板を設置する(平成7年)(写真3)。モニュメント・ゲートを作る(平成8・9

年)。お祭りのな装置といえる、伝統的な「徳川宗春からくり」を建てたかと思えば(平成9年)、「ロボットからくり」をつくる(平成10年)。やはりゴチャゴチャ感がある。顧客や路行く人たちのさまざまな状態に対応できるよう、AED(自動体外式除細動器)を導入して置く(平成17年)。「親切心」がある。商店街の店々がさらに協力できるように、大須商店街の組合会館を建設する(平成11年)。平成17年には、電子マネーの利用ができるようにして、買い物をしやすくしている。また、クレジットカードも導入した。携帯をかざすだけでキャッシュレスな買い物を促す。これが現在、大須の200店舗で使える。18年には、大須イベントのシンボリックな場所・大須まねき猫のガイドを設置する。来訪する客数に対応できるように、AEDを順次、買い増している。歩いていて目に付くのは、電気店ばかりパチンコ店ばかり、お店の看板などに「トイレいつでもご利用ください」と歓迎の意を伝えていることだ。大須には、安心して来ることが

できる。この平成22年3月には、まねき猫のいる「大須ふれあい広場」の頭上に、立派な矢倉のようなアーケードを設置したばかりだ。これで、多くのイベントが、天気のかんにかかわらず、実行できるようになった。いつも来る人のことを考えている。平成5年からは、イラスト式の大須マップをつくり、毎年改訂している。平成21年の大須マップは、30万部も配られた。通りの真ん中に椅子を置いて簡易休憩所にして座ってもらっている。

装置のハードウェアのほかに、人的な補強もおこなう。平成22年(2010)1月17日、大須の街を案内する「大須ものしり町人」を認定した。商店街を歩いて迷っている人、困っている人を助けようというのである。ガイドの法被を着て、夕方に大須商店街連盟にもどってきた。これになるには、試験に合格しなくてはならない。大須の歴史や通りの名前や大須に関わる事象の説明が問われる。これに合格すると、認定証が発布される。ここには「貴殿は大須検定において



写真3 大須の案内板。各所に置かれ英語・ハングル・中国語で書かれている。

優秀な成績を納められましたので大須ものしり町人と認定いたします」とある。大須商店街連盟の小野章雄会長名で発布される。こうして街の工夫で、大須と他地域をつなぐガイドを作り出していくのである。

平成18年、こうした、工夫・努力が、中小企業庁が全国から選んだ「がんばる商店街77選」に選ばれ表彰される形で実っている。愛知県からも「ブランド商店街あいち」に選ばれ表彰されている(平成20年)。全国から視察に訪れる商店街組合や市町村も多い。平成21年には、40～50件の視察団がやってきた。韓国の企業も視察にきたという(大須商店街連盟・近藤文博事務局長談)。人を魅了するホスト心のソフト装置が大須にはある。客もてなしのホスピタリティーが、大須に一つ一つ積み重ねられている。

行事・祭り・イベントの連続

大須には、いつも何かがある。つまり、祭りやイベントが、年中、数多くおこなわれている。大須商店街連盟の主催では、「大須春まつり」(4月の第一土曜)、「大須夏まつり」(8月の第一土曜)、「大須大道町人祭」(10月の第二金～日曜)がある。大須観音では毎月18日と28日に、「骨董市」を開いている。「甘酒接待」もおこなう。毎月28日は、万松寺の縁日「万松寺身代わり不動縁日」の日でも、大光院の「明王殿縁日(みょうおうさん)」でもある。2月には、「節分会」、5月には、「馬の塔」がある。他の協賛や共催行事もある。11月から1月まで、お隣の南大津通に呼応して、南大津通イルミネーションに加わる。名古屋全体の商店街行事に呼応して、4月には「名古屋商業フェスタ」を、11～12月には「商店街元気まつり」をおこなっている。この二つは、ともに、名古屋市商店街振興組合連合会

がおこなっている全市的な行事である。また8月の「日本ど真ん中まつり」にも呼応する。秀吉・信長・家康を生んだ名古屋の三英傑を記念した「名古屋まつり」にも歩調をあわせて祭りをおこなう(10月)。むしろ、大須の数多くの行事に合わせたいと他地域が願っているふしさえある。人々にとってみれば、大須にいけば「いつも何かやっている」ゴチャゴチャ、ワイワイ感がある。

最大イベント、大道町人祭

大須の商店街のうち万松寺通では、「氷の彫刻コンクール」を古くからはじめた。これを33年間続けてきた。レベルが高く、大須で認められたら、日本全国に通用するという。「働くお父さん・お母さんの絵コンクール」これも同じ歴史時間を刻んできた。一世代の長い歴史を持つ。まとまりを求めて家族のあり方に一つの提案をおこなっている。大須ふれあい広場の上の矢倉アーケードで柱の色を決めるのも、お祭りにしている。金の柱・銀の柱をどの商店街に対応させるか、商店街対抗の「玉ころがし」で決めたのである。お祭りを自ら創りだす力が、大須にはある。

こうした大須のイベント・祭りのなかで、もっとも大きな祝祭が「大須大道町人まつり」である(写真4)。平成22年(2010)の秋で、第33回を迎える。

大須大道町人祭の起源は、「人間のまつり＝アクション大須」にある。昭和50年(1975)6月28日に催された。名古屋のなかで賑わいを栄や地下街(昭和32年(1957)3月地下鉄開業と同時に開業)に奪われていくなか、「第二のふるさと創造」や「ひとの優しさ」をテーマに、都市計画の名城大学・池田芳一助教授(当時)を中心に500



写真4 大須大道町人祭の賑わい。

名もの学者、画家、音楽家、デザイナーらが集まり学生のエネルギーも発揮されて、「アクション大須」が実施された。街頭落語、フォーク演奏、街頭移動演劇、ガラクタ市などが演目となり、とくに大須観音の鐘つき堂でのロックオペラと辻カゴ50台が目玉であった。オペラとロックの結合、観音霊場とロックの結合、アンチ・モータリゼーションの辻カゴ、街頭で移動する演劇、と旧来の価値を打ち破って時代を拓いていこうとする気概に満ち溢れていた。大道芸そのものの精神が発揮されていた。35万人もの人を集めた。第二回の実施のあと、学園祭の延長、一過性の祭り、商業主義に陥る、昨年の二番煎じ、という批判が出た。

これを受けて、その二年後の昭和53年(1978)、「下町の原点を取り戻そう」と大須商店街の仁王門通などの青年部や発展会が話し合い、大須の地元が中心となって「大須大道町人祭」が立ち上げられた。下町の原点を示す大道芸を復興しようという大きな意志があった。ソトからの働き

かけを受けつつ、大須の中から立ち上げた。当時の名古屋の露天商の元締め、中日プロダクション社長・高橋寿々夫、演出家の岩田信一も賛同したが、大須大道町人祭の第一回実行委員長には、地元の原智彦が選ばれた。昭和53年10月14日(土)～15日(日)開催。寺山修二も賛同して参加したが、中心は、人間ポンプやオートバイサーカス、猿回し、自転車の曲乗り、などやはり街頭芸であった。このときの賛同者のインテリア・デザイナー・黒野茂は、このときすでに大須500店マップを作っていた。当時は、近代化のなかで、「芸人の肩身がどんどん狭くなる」「芸を見せる場所がなくなっていく」時代であった。渋谷で警察に追い立てられて大須に来た芸人は「大須では堂々と芸を見せられる」と喜んでいて(原智彦談)。大須観音境内の猿回しに群がる観衆の写真を載せて、祭の賑わいと成功を伝える毎日新聞は「久々の登場。人気をさらうサル回し」とキャプションで謳っている(昭和53年10月14日夕刊)。「こどもの頃、大須観音さ

んでは、屋台があつて、がまの油売りとかバナナの叩き売りとかやってました。大道芸を見ながら遊びましたね」(石原司郎・コメ兵三代目社長、平成16年〈2004〉9月21日毎日新聞朝刊)。大須を包む、こうした全体としての路技とともにある生活感が、大須大道町人祭を根底から支え育てた。

アクション大須では、「シラケを吹き飛ばせ」という標語で若者にメッセージが向けられた。一方、大須大道町人祭では、「日本の郷愁を呼び起こす」と新聞は書いた。若者と老人の両方が関心を抱いたのである。家族連れが多く来訪して、老若男女が交わる。両日で50万人もの人手を集めた(警察発表)。だが、その奇抜性・反骨性は、アクション大須以来、面白さとして継承され貫かれている。新聞は、大須演芸場広場前の「お化け屋敷」「オートバイサーカス」や、主会場・大須観音境内のプログラムを紹介する。「女横綱土俵入り」「商店街の店主コマーシャル実演大会」「女子大生フォークコンテスト」「ホステス歌謡カラオケ選手権大会」など「奇抜なプログラムが人気を呼んだ」(毎日新聞1978年10月14日夕刊)と結んでいる。大須大道町人祭の賑わいは、同日、同時におこなわれていた三英傑(信長、秀吉、家康)行列をもつ官製の「名古屋まつり」との対比で語られる。200人の自衛隊エキストラを使い一億円の予算で行う「名古屋まつり」との比較である。「貴族のまつり」と「庶民のまつり」と対比されることもある。中部読売新聞は、「庶民の街復活 “官製”に勝った」と書いた(昭和53年10月16日朝刊)。市民まつりの成功である。市民からは「来年もやって」という要望が寄せられた。この庶民エネルギーが今日まで大道町人祭を継続・発展させてきたのである。そして、横浜、静岡とならんで、日本三大「大道

芸まつり」とさえ称されるようになってきた。このときにも、大須の人たちは自信を見せる。ギリヤーク尼崎や雪竹太郎など日本を代表する大道芸人が「大須に来るとホッとする」という、その庶民の感覚を自負する。第一回の実行委員長・原智彦は、「大道芸に理解ある官庁が始めた横浜、県とNHKで作った静岡、これに対して、大須は町人や民衆がみんなで創った」と語る。

現在では、市民や他地域住民を取り込んで、表舞台にあげる「おいらん道中」のプログラムもある。もとは、東京・吉原にある松葉屋に頼んで、人を呼んでいた。このプロの精神と技術を学んで、大須独自に手作りできるようになった。オーディションである。花魁(おいらん)や禿のなり手を市民から募集し、280人の応募者のなかから20人を選んで(平成12年〈2000〉)、前夜祭一回と祭りの両日三回ずつ計七回、商店街を練り歩いてもらう。20キロプログラムもある着物とカツラを着用するため、体力がいり身長158センチメートル以上という審査条件をもうけている。したがって、選考では、体力測定がある。花魁独特のくねる歩き方「八文字」のウォーキング審査もある。これまで18～58歳の幅広い年齢層の女性が花魁役をつとめてきた(平成13年までの数字)。この盛り立ても手作りだ。地元のロック歌舞伎劇団・スーパー一座が盛り立て役をつとめ、脇を固める役を演じ、道中警護のアルバイトを指導する。どこまでも庶民の祭りである。アマをプロ的なハレ舞台に乗せる。学んだプロと老舗の技をアマに結んで花開かせるのである。その演出・脚色を大須がうけもつ。

大道町人祭は、地元の芸披露のハレ舞台にもなる。大須太鼓が披露される。子どもの部や大人の部さえも引っ張ろうとする意気込みをもつ

大須若者太鼓集団「須鼓路（すころ）」も誕生して、演奏を披露する。体力にまかせた力強い演奏を目指しており、平成13年(2001)2月には台湾で五カ国の競演に参加した。大須太鼓がおこ

なう演目は、大須まつり太鼓、大須万栄太鼓、大須鈴太鼓、と大須文化が主張される。たとえば、大須万栄太鼓の口上は、次のようである。

①尾張名古屋のお城下れば、真福寺の宝生院

これぞ大須の観音様よ 知るも知らぬも まず寄りやせ

②節分若草夏祭り 大道芸もあるでなも

祭り囃子の鳴り響く 大須にいっぺん来てみてちょー

③家内安全 商売繁盛 招福祈願のこのしらべ

これを聞いたお客様 福が来る来る福が来る 招福万栄花盛り

このように、大須性と名古屋性を前面にだす。語り方も、名古屋弁で地元性を強調する。だが、他の地域文化とも結びつく。能登の豊年太鼓、岐阜の孫六太鼓を借用し、ここから創った「かがり火太鼓」も披露される。祭りが、大須と他地域を、ウチとソトを結んでいるのである。

そのことは、地道な地元の芸披露という形で、大須消防団の火消しにまつわる芸能「木遣り」や「階梯はこび」の技披露にも現れる。「階梯はこび」は、他地域にはない大須独自の技である。こうした地元からプロに匹敵する技に飛躍しようとする技もあれば、人間身体の生命と悲哀と尊厳を踊るギリヤーク尼崎の津軽三味線をかかえた「念仏じょんがら」、身体一つで世界の絵画や彫刻を模写する雪竹太郎の「人間美術館」など、全国にファンがいる大道芸の極致に行く芸も披露される。この二人が、まず大道町人祭のトリを務める。ギリヤーク尼崎の「念仏じょんがら」には、芸の後、救済を求めてか、力を得ようとしてか、涙して尼崎の身体をサスリにくる女性も多い。大須で、ハレとケが交流する。日常と深奥が交流する。大駱駝艦による裸の男女の肉体に金粉を塗った「金粉ショウ」は、肉体

の極致を窮めようとしてエロティシズムを撒き散らす。観客層が一挙にかわり、異様な雰囲気と興奮の視線をもった多くのオジサン・カメラマンが急増して、熱気をおびる。大須で、当たり前と突飛が交流する。プロの世界のなかでも、修行中と至芸がここに交わる。

大須には、発信性がある。ちゃんと地域社会に根ざしている。ジャグラーのタックは、名古屋出身で大須大道町人祭を見て、ジャグラーの道を歩みオーストラリアで修行して帰ってきた。エクアドルからネイティブ・ホライズンのフォルクローレがやって来た(第25回)。ニエ・アルジョンさんは中国雑技を繰り出す(第22回)。日本と外国を大須が結ぶ。そのことを、日常の大須に見てみよう。

六 異なる生き方が交わる街・大須

～多文化共生

多民族交流の街・大須

まず大須といえば、ワールドカップなどブラジル・サッカーの国際試合があると、ブラジル人が東仁王門通にあるベーリンバウに集まる。普段でも、ブラジル人の情報交換の場になって

いる。ここでは、故郷の味・豆の煮込みスープ「フェイジュン」が食べられる。ブラジル料理レストラン・ペーリンバウが一階の食材店を改装し、現在の開放的な形態のレストランになったのは、平成12年(2000)のことである。これを経営しているのは、南米系の食材をブラジル・レストランや食材店に売って展開している「安藤商店」の系列会社「アンドウアカタジスタ」である。万松寺通にある喫茶食堂「アクネ」と同様に、ブラジル人が集まり、ブラジル系の客の要望がここを育てたといつてよい。

大須にあるのは、料理のペーリンバウ、喫茶アクネのようなブラジル料理だけではない。メキシコ・タコスの料理店、トルコ料理店メルハバ、韓国料理店、大須中華街、香港ちゃんぽん、台湾の焼きパオズ(包子)、南欧を主張するカフェ・アンナログなどが競う。日本らしさ・名古屋らしさを出す店もある。名古屋名物ひつまぶしを出す宮田楼や「やつ古」、名古屋名物あんかけパスタを出すハッシュ・デ・ロッソなど、大須には民族料理やご当地料理が競い合っている。衣装店でも、ブラジル・ファッションの「Stullus Modas」、外国人から見ると日本エスニックな、オリジナル和雑貨の「もみじ屋」、南米アンデスを謳う店PUKIO、などもある。ガーナ人が東仁王門通で経営するHipHop系の衣装店Dr.Jack、ナイジェリア人が新天地通で経営する衣装店Jiggy Bat、同じくナイジェリア人が万松寺通で経営するHipHop系の衣装店Brooklyn Villageと、滞日アフリカ人が経営する店が随分と出ている。東仁王門通の小さな脇道に入ると、ジャマイカ系アフリカ系を唱えるラスタ(ラスタファリアン、エチオピアのハイレシエラシエ皇帝を崇める)の小店「CHAKACAKA」、アジア・アフリカ雑貨の小

店など何軒もある。エジプト性を謳うクレオパトラという店もある。西アフリカにある特徴的な言語の発音、[p]の爆発音[kp](プエっ)をつかった店名「KpleKple」(プエレプエレ)というアフリカン雑貨の店もある。

大須四丁目にある自然博物館「ランの館」は、自然を謳い「アジアの庭」をオープンさせた(平成15年〈2003〉5月)。このとき、バリ音楽演奏とバリ民族舞踊のイベントをガムラン演奏とともに披露して、民族色を強く打ち出した。さらに、インドのシタール演奏、シルクロードのウィグル音楽演奏など引き続いておこなっている。ここで、アジア諸民族の民芸品のバザーもおこなっている。大須大道町人祭においても、ベリーダンス、フォルクローレ、フラメンコと、トルコ、南米、スペインの民族舞踊が競演する。

安価で有名なフードショップ・イトウの前で、二人の夫人が買い物相談をしていた。その言語はロシア語だった。万松寺通ですれ違った一団の話していた言語は、タイ語だった。平成22年(2010)3月の土曜日、一日で耳にした言語は、ポルトガル語、スペイン語、英語、中国語、ハングル(韓国・朝鮮語)、タイ語、イタリア語、ロシア語、ベトナム語、アカン語(ガーナ)、イボ語(ナイジェリア)、日本語と、なんと12カ国の言語を耳にした。多民族が大須に交わる。

ウチとソトが交流する街・大須～他者の受け入れ

大須には、中で地道に内的努力を重ねて大須でまとまっていく凝集性と、大須を越える地域開放性がある。それは、土着と移住者の交流、ウチとソトの交流と呼びかえられる。

大須太鼓における新瑞橋からの太鼓指導者の参加のように、他地域からの参加ということが重要なポイントである。新瑞橋からの大須への

太鼓指導者は、大須の人たちとともに、いい演奏を創っていきこうという構えである。大須側も新瑞橋側も共同で大須の民俗文化を創っていきこうという姿勢が見られる。大須太鼓の演目も、能登や美濃の演目を借りながら「大須として」やっていく。ウチとソトが交流して、大須性を創り出す。

それは、商店街の店の機能にも現れる。万松寺通の店舗の商域を名古屋大学の都市人類学演習で調べたことがある(資料2:酒向知佳調べ)。表は、店の業種、店のオープン時期、客の年齢層、チェーン店であるかどうか、馴染み客と通り客の割合、店主(話を伺った人)の年齢、その前にここは何の店だったのか、などを表している。

ここでは、開業の時期つまりその店の歴史の「古い新しい」の違いと、馴染み客と外来客との比率に注目したい。ここには、老舗の山中華羹店、昭和初期開業の化粧品店「べっこう屋」、30年前に開業した洋服店「マリーズショップ」、大正8年(1919)創業のアジアの靴店など古い店と、チェーン店に代表される、開業二年前、八年前といった、ソトからやってきた新規開店の店とが混在している。そのこと自体がまず新旧の交わり、ウチ～ソトの交流である。

そして、馴染み客と通り客の割合を見てみよう。通り客は、まず大須の外が多いと考えてよいだろう。馴染み客は、遠くから来る固定客がいることも事実だが、極端に専門度が高い店で

資料2 「万松寺通りの店舗の商域」(酒向知佳、平成14年(2002)調べ)

業種	オープン時期	客の年齢層	支店はあるか	馴染み客:通り客	前は何の店だったのか
香水販売	平成5、6年(1993～94)頃		ある(2店舗)		
コーヒー屋			チェーン店		
洋服店	平成11年(1999)	10～20歳代	チェーン店		昔からの洋服店
帽子屋	昭和22年(1947)	20～80歳代	ない		
和菓子屋	明治33年(1900)	20～80歳代	ない	7対3	
洋服店	昭和28年(1953)	50～70歳代	ない	1対1	
洋服店	明治35年(1902)頃	50～80歳代	ない	3対7	
たこ焼き屋		10～50歳代	チェーン店		
中古パソコン	平成13年(2001)10月		チェーン店		
洋服店	平成6年(1994)	10～20歳代	ない		
靴店			チェーン店		
めがね屋	平成13年(2001)10月		チェーン店		同じ系列の店
化粧品店	昭和初期	50～80歳代	ない	7対3	
めがね屋	平成14年(2002)4月	20～30歳代	ない		昔からの化粧品店
洋服店	昭和23年(1948)	40歳～	ない		
パソコン店	平成11年(1999)		チェーン店		昔からのパソコン店
洋服店	平成13年(2001)	10～20歳代	チェーン店		昔からのそば屋
洋服店	大正8年(1919)	20～80歳代	ない	3対7	
洋服店	昭和9年(1934)		ない	3対7	
洋服店	昭和47年(1972)	20～25歳	ない	8対2	
古着屋	平成9年(1997)	20～70歳代	ない	7対3	
洋服店	平成4年(1992)より前	10～20歳代	チェーン店	3対7	
古着屋	平成6年(1994)	20～60歳代	ある(1店舗)	リピーター多い	
洋服店	昭和初期	10～70歳代	ない	1対1	
ベルト屋	平成12年(2000)	20～40歳代	ない	2対8	昔からの雑貨屋

はないから、まず地元や近在からの客が多いと想定しても大きな間違いではないだろう。全体として、表をみたとき、馴染みと通り客の割合が七対三、八対二といったものと、その逆の三対七、二対八といった割合のものとが、ほどよく混在している。つまり、大須は、商業文化の地元性を保持しながら、経済的にはゆるやかにソトに向かって開放して行っているといえる。これが、地域の文化と経済をともに維持していく巧みな方法だといえる。大須は、新と旧、ウチとソト、文化と経済をつないで結ぶのである。

七 むすび～キッチン、はずれ、冒険を許容する街・大須

正常と逸脱が交わる街・大須

大須の街の特色を整理していこう。大須には、地道で確かな住民の営みがある。大須太鼓をはじめ小学校や幼少の組織がある。商店街の若主人の世代組織は、40歳ほどで大須大道町人祭の委員長になり、これを主催してプログラムの全体を創案していく。消防、防災、商店街組織と、壮年、老年組織もしっかり「人々のため」を思う力がある。街のためには参集して出る。多くの人が時間を割く。にこにこクラブの老人たちも、福祉協議会やソトの専門エネルギーと結びつきながら、老を越えたエネルギーを発揮する。大須小学校と地域の協力関係、防災組織、消防組織を見ても、確かなコミュニティ性がある。幼少から若年、成人層から壮年、老年と、人々が大須の街に繰り出しであう。

商業的に見ても、おもちゃや子ども服など、子ども用の店も多い。大須四丁目には、集合店舗のキッズランドもある。若者のベルト店、若者用のカジュアル中古服店、おじさんたちの洋装店、おばさん・おばあちゃんたちの呉服店、

さらには、門前町通を南に突きぬけると、大須の仏壇街もある。大須で「あの世」と「この世」がつながる。そして、新天地通、赤門通には未来志向の電腦街が広がる。電気、音響、コンピュータ関係の店が並んでいる。現在と未来が交叉する。そこに寺町の歴史が重なる。多世代・多時代が大須に交わる。

こうしてウチの多世代とソトの多世代が交わる。複合的にクロスする。大須のケ・日常の多時代性と、大須のハレ・非日常の多時代性とが、交わる。これは力だ。しかも、その交わりの場・大須は、歴史的に見ても、丸の内・名城とは違う下町性をずっと維持してきた「誇れる街」である。世界のスケート・リンカーも大須から羽ばたいた。イベントも、年中、多様に生み出し用意する。その代表的「祭」・大須大道町人祭も、官の名古屋まつりに対して、庶民性を貫くどこかで反骨的な市民主体の祭りである。

大須の街には、寺町としての歴史がある。大須三丁目にある三輪神社では、京都の三十三間堂の矢場を模してここに矢場を作った。これが矢場町のはじまりであり、大須が矢場の元なのである。だから、「名古屋名物」の矢場トンカツも発祥と本店は大須にある。昔ながらの中公設の旬市の市場がある。伝統的な創業50年、100年以上を誇る、香屋、うなぎ屋、ういろう店、煎餅屋、ようかん店、呉服店、クツも売っているが靴店ではない履物店、八代目を名乗る店などが軒を並べる。大須には、名古屋における庶民信仰や慣習・民俗のメッカという自己認識がある。庶民文化への静かな誇りがある。それを活かしていく自覚的で継続的な努力がある。したがって、「安いこと」安価は、いいことだ。大須には「安価性」もある。庶民生活性に充ちている。大須の誇れるいま評判の名物店は、団子、

甘栗、名古屋あんかけパスタ、格安スーパー・サノヤ、フードショップ・イトウなど、みな庶民名物である。

大須には、演劇性がある。これには、大須の持つ専門性が関わる。まず、専門性の話からしよう。大須は、専門性、執着性の街と言いうる。コーヒーにしても、靴にしても、専門性がある。お香の春香堂、ういろうの老舗、評判の店など、執拗に専門性を追求めて「内容にウルサイ」店が多い。「凝っている」。ここが、名古屋の映画・演劇のメッカであったことから、演劇用・プロ芸能者用の化粧を扱う店もある。レザーアイテムの皮製品、歴史の古い専門的な造花店も数軒ある。アーチェリーの専門店がある。これがダーツの専門店と聞くと、ちょっと執着性に展開する。足を伸ばせば若宮大通に昆虫王国、ロボット専門店、全国でも珍奇な肌着専門店「まからん屋」などが出てくる。この名前などもはや娯乐的・逸脱的である。このように、専門性がちょっとずつ執着性を増して、ヘンになっていく。執着性から奇異性へと展開する。格闘技道具専門店、蒸し料理「ぶりこ」(店名がヘン)なども、そうである。

つまり、大須には、逸脱性がある。逸脱を笑いと許容に換えていく文化の土壌がある。少しずつズレている店が多い。「～にしてはヘン」。名古屋福音伝道協会の建物も教会建築にしては「ちょっとヘン」。大須射撃練習場というのもこの時代にはズレて面白い。二台のロボットのパフォーマンスがある全自動ラーメン店、ハーブを使ったボディ・アートの店もある。店の命名もラスベガスではなく「Love Vegas」、ハレンチノ、ナンジャラヤ、とんま(豚肉)、まからん屋、と新旧のダジジャレが競合する。大須観音に参ってすぐ目に付く巨大な仁王壁画もヘンで

ケツタイなコントラストである。10円饅頭。妖しいか怪しくないか和洋の占いの店、手相の店、「大須易占い」と銘打った店もある。何のこともか「七色」ヨガ。かつては刺青を彫る専門店も大須三丁目にあった。水タバコを飲ませるカフェ、メイド服で応接する萌系の店もある。「キャワイイ下着」と銘打つ店、ロリータ系・ゴチック系衣服の専門店もある。どこかヘンなパーセントで「スープ完食率85%」を謳うスッポン店、「名古屋魂」と銘打つガイコツ丸出しのロックの店、変装・変身を旨とする鱗粉堂やSkunkといった店もある。ここは、変身を可能にする空間である。ウキウキ自分が変わる。大須は、はずれ・遊び心を許容して、正常と逸脱が交わる懐深い街なのである。大須は、栄が「夜眠らない街」に対して、「夜眠る街」である。それでいて、こんなにキッチンで洒脱な夢空間を創り上げ人々を魅了していることが、その地域文化力の奥深さを物語るものである。

演劇性、表現性の街・大須～斜め・試み・ハズレを表に出していい街

上で述べたように、専門性が執着性になり、執着性がやりすぎて逸脱性へと、展開する。大須は、その逸脱と独創の自己オリジナリティを表現しようとするエネルギーに充電している。歴史的に見ても、かつての映画街、劇場街であり、中京地区唯一の演芸場・大須演芸場を抱えている。スーパー歌舞伎の本拠も大須にある。七寺前にある「七ツ寺共同スタジオ」では、多様な演劇イベントが披露されてきた。寺山修二も三枝も明石屋さんまも、大須には敬意を抱く。商店街を歩くロリ・ゴチ系のお姫様ファッションの女の子は、大須の道と空間を自らの劇場としている。ここは、老若男女の自由なお洒落工夫や

表現が許される雰囲気を持つ。アートフラッグ・コンテストやNAW(名古屋アート・ウェーブ)など、大須の商店街全体を使ったアート・イベントも数多く行われてきた。大須には、どこか、表現をよしとする風潮がある。「表出の精神」が横たわっている。平成22年(2010)の大須は、時代を生きる「生物多様性」に向けて表現を用意している。平成22年10月に開かれるCOP10国際会議に向けて何か、アートを仕掛けようとしている。大須では、いつも、誰かが、何かを、見せている。ギャラリーやアトリエも多い。「AG Café」では、韓国から来たチェ・ユン・ジョン学芸員がアートと食を合作する作品展を開いていた(平成22年4月)。大須は、表現することは生きることだ、と主張する街なのである。

大須は、リサイクル性の街でもある。古着、時計修繕、古本、電気製品パーツ、中古パソコン、和服着物をつかった洋装、などを扱う店が多数、大須に集積する。質屋・買い取り店・リサイクル・アウトレット店が多い。コメ兵も「リユース」というキーワードで売っている。その意味からも、新と旧が交わり、循環する街なのである。このように、大須は、商店街にあるいくつかの業種も、ここでの言語、民族、世代、年代・時代、男女の性別も、正当と逸脱、官と民、完成と中途半端・試作・使い古しも、さまざまなレベルの多様な異質が、ここで多角的に出会い交わる創造の都市なのである。

付記

この論考の元になったのは、名古屋市中区が区政施行100周年記念事業として出版した名古屋市『中区誌』(2010年12月刊)のなかに書いた拙稿「多角的共生都市としての大須—伝統的の老

舗から滞日外国人まで」である。ここでは、何かと伝えきれないことがあった。特に、区行政・中区の編集責任者から出た、当初の副題「伝統的の老舗から滞日アフリカ人まで」の「アフリカ人」をはずせという理不尽な意見のもと、「滞日外国人」へと変更を余儀なくされた。アフリカ人の名誉回復とすべての滞日外国人の尊厳維持のために、この「アフリカ人」というタームを含んだタイトルで、論考を世に出す必要があった。さらに、前稿では、書ききれなかった、大須の多種・多様・多民族・多角的な異文化交流のかたちを、より論を深めた記述で、考察する必要があった。こうして今回、限られた1万2000字の前稿から、2万40000字にして、ここに発展した新たな論考として提示した。大須商店街連盟事務局長・近藤文博氏、そしてこの連盟の事務局長時代から多様な教示をいただき、名古屋大学で講義もしてくださった大須商店街連盟会長・小野章雄氏、そして、長年わたしたちを導いてくださったすべての大須の人たちに、深い感謝の念を表する次第です。同時に、下記の参考文献を記した学生諸氏をふくんで、名古屋大学の大須地域・都市人類学調査にいろいろな形で参加し共同調査をしてくれた、すべての学生諸氏の尽力にも大きな感謝の念を表します。

参考文献

- 和崎春日編『大須地域調査報告書—名古屋大学比較人文科学研究年報』2001年4月
勢村かおり「大洲太鼓—郷土芸能としての和太鼓」上掲『大須地域調査報告書』
関本真紀「大須消防団と『火消しの芸能』」上掲『大須地域調査報告書』
筒井正「大須と名古屋仏壇」上掲『大須地域調査報告書』

中川千草「大須に暮らす人々の生活区分認識」上
掲『大須地域調査報告書』

松村研二郎「大須に集まるブラジル系の人々」上
掲『大須地域調査報告書』

天野美咲「大須の防災・防犯について」名古屋大
学・和崎研究会発表、2001年

酒向知佳「万松寺商店街の実態について」名古屋
大学・和崎研究会発表、2002年

松久実代子「大須の4つの顔」名古屋大学・和崎
研究会発表、2004年

長坂康代「大須学区高齢者のコミュニティづく
り」名古屋大学・和崎研究会発表、2004年

大須商店街連盟『大須商店街連盟概要』2009年6
月

(資料1)「大須通行人調査」(松代実代子、平成
16年(2004)調べ)

(資料2)「万松寺通の店舗の商域」(酒向知佳、平成
14年(2002)調べ)